



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

第三八七号

大寒 だいかん
一月二十日

大被 おおほらい

一年で最も寒い「大寒」を迎えました。寒波の到来も予想され、なかなか気の抜けない時期でもあります。

そんな寒中の一月三十一日、伊勢神宮内宮では、「大被」が午後三時から行われます。儀式は、始まりを告げる太鼓の音から。斎館から白い装束を身につけた神職たちが参道を進み、五十鈴川の御手洗場近くの被所にずらりと並びます。これから、来月の祭典に奉仕する神職の穢れを祓う「大被」が行われます。

神職の白い装束は、「浄衣」と呼ばれます。神嘗祭などのお祭りのときには、同じ白い装束なのですが、そちらは「斎服」となります。斎服は袖がしっかりと縫い付けられている正式な装束で、一方、浄衣は袖が少しだけ縫い付けられていて脇が大きく空いているので身動きがしやすく、やや略式の装束であるとのこと。また、頭にかぶる冠り物も異なり、大被は「烏帽子」、大きなお祭りの時には「冠」となります。神職の装束や冠り物も、お祭りによって異なっていたのです。これからはじっくりと拝見しようと思えました。

大被は、参列した神職に榊が配られ、権禰宜が大被詞を読み大麻（麻を付けた榊）で被い、全員で一拝二拍手一拝をしたあと、息の付いた榊が回収され、終了します。儀式が終わって立つにあたってのお辞儀は、「揖」と呼ばれ、浅沓を履く前の揖なので「沓の揖」とも。神宮司庁の広報室に詳しくうかがうと、細かな点がよくわかります。

来月のお祭りとは、一年の耕作始めを祈る祈年祭。春はじつはもうすぐです。

文 千種清美



おかげの里便り

おかげ横丁

○『おかげ横丁 節分の市』

旧暦では、立春を一年の始まりとし、その前日の節分は現在の大晦日と同じように考えられていたため、昔から1年の幸せを願う様々な行事が行われていました。おかげ横丁では、各お店が一斉に福を呼び込み、町中が福でいっぱいになる「節分の市」を開催します。

日時／1月21日(土)～2月3日(金) 10:00～17:00 (催しにより異なる)

場所／おかげ横丁一帯

● 縁起の市

節分の豆まきに使うお面や豆のほか、魔除け・厄払いの意味があるといわれている「厄除けいわし」などを揃えた賑やかな市です。

場所／おかげ横丁内「特設屋台」

● 子供鬼やらい

横丁に現れたいたずら鬼を、子どもたちが豆をまいて追い払います。
※雨天の際には、主催者の判断により中止となる場合がございます。

日時／2月3日(金) 11:00～12:00

場所／おかげ横丁一帯

● 福のおすそわけ

今年の福人(年男・年女)が、「宝舟の絵」と「豆」を皆さまにお配りします。(限定500袋)

宝舟の絵は、節分(旧暦の大晦日)に枕の下に敷いて寝ると良い夢を見ることができ、やがてそれが現実になると伝えられています。

日時／2月3日(金) 14:00～

場所／おかげ横丁「太鼓櫓」周辺

お問い合わせ／おかげ横丁総合案内「おみやげや」電話0596-23-8838

五十鈴塾

○『「絵巻物」を読む④～一遍聖絵 念仏踊りで教化～』

一遍上人の教えは念仏を唱えれば貴賤を問わず極楽往生ができるというもので、布教のために踊念仏を手段として使いました。いさか見世物的興行に近く、踊り屋という一段高いステージを設け、一遍に同行した僧侶や尼僧など20人～40人が輪になって踊りながら念仏を唱えるというものでした。観客の方も次第にエスカレートしてゆき、集団となって踊ったといわれます。聖絵にはこうした様子が詳細に描かれ、当時の庶民の有様が手に取るようにわかります。一部の上流社会を除いてはまるで犬猫のように扱われていた一般大衆が、どんな暮らしをしていたかを知る手段として有効な絵巻です。神崎塾長とじっくりと見て庶民の喜びや悲しみ、そしてしたたかさなどをくみとりましょう。

と き／2月2日(木) 18:30～20:00

講師／神崎 宣武(民俗学者・五十鈴塾塾長)

参加費／一般 1,700円 会員 1,200円

場所／五十鈴塾右王舎

講座についてのお問い合わせ・お申込み／電話0596-20-8251

※新型コロナウイルス感染拡大予防のため中止となる可能性があります。

五十鈴茶屋

○『五十鈴茶屋節気菓子』

ふく まめ
福 豆

立春を迎える節分の豆まき。煎った大豆を福豆といいます。
お多福豆の餡で白餡を包み、節分にちなんだお菓子上に仕上げました。

かんぼたん
寒牡丹

雪が舞う中、凛と咲く姿が印象的な寒牡丹。
白餡の練り切りでその美しさを表現しました。

ふき どう
路の臺

雪の下から若芽を吹かせ、冬の終わりを教えてくれる路の臺を洋酒が
香る黄身しぐれで表現しました。